

KONAN UNIVERSITY

関連企画 『育てることの困難』 市民フォーラム報告

著者	森 茂起
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	8
ページ	64-65
発行年	2007-02-14
URL	http://doi.org/10.14990/00002601

関連企画 『育てることの困難』 市民フォーラム報告

森 茂起

七月二三日に開催したシンポジウム、『育てることの困難—家庭・教育・仕事』は、会場がほぼ満席になる参加者を得て、充実した会となった。しかし、いつもながら時間の制約のために、フロアからの発言をいただきながら議論を深める時間を十分取ることができなかったことが残念だった。

当日の参加者に、「育てることの困難」に関するさまざまな思いがあることは、わずかな時間のなかで当日聞かれた発言、あるいはアンケートに驚くほど濃密に書き込まれた多くの意見から感じ取ることができた。そのこと自身、現在の「育てること」の難しさを表している。そこで、参加者がシンポジウムの場で感じ取り、考えたであろう内容を出し合い、討論する機会を持つために「市民フォーラム」を企画し、一二月二日に実施した。

「市民フォーラム」という形態には、企画者のある意図が込められている。それは、『育てることの困難』関連の研究会における汐見稔幸先生の議論に関係している。汐見先生によれば、日本の戦後社会の失敗は、個人と国家の間に存在すべき「中間世界」が育たなかったことにある。つまり、市民が一個

人として参加し、家族関係や仕事上の立場などから離れた個人的意見に基づいて論じ合い、考えを発展させる場の欠如である。「育てること」をめぐるでも、子育てをする親の立場、子どもを待たない立場、教育に携わるものの立場、祖父母の世代の立場などによって感覚が大きく異なり、相互の理解が難しいのが現在の状況である。理解が難しいだけでなく、そもそもそうした立場の違う者同士が意見を戦わせる場が存在しない。何らかの機会に意見の違いが表面化することがあったとしても、家庭内にせよ職場にせよ、討論の場として成立していないために、関係を慮って意見を抑えたり、あるいは実りのない衝突になったりすることが多いであろう。今回の「市民フォーラム」は、その討論の場を設定しようとしたものである。

シンポジウムの参加者に向けて、以上のような趣旨とともに、次の方針を含む案内状を送付した。

- ① 出来るだけさまざまな立場の方に参加いただきたい。子育て真つ最中の母親、父親、これから結婚しよう、あるいは子どもを持つとうとしている方、あるいはそれらに躊躇を感じている方、子育てを終わった立場から今の子育てについて考えている方、社会に出ること、仕事を続けることの難しさを感じている方、若い世代の生き方に疑問を感じている方など。これ以外にもさまざまな立場があると思います。
- ② 内容は、シンポジウムで扱われた「家庭・教育・仕事」をめぐるもの、それに関係するものであれば、あらゆる話題

を対象とします。どのあたりに議論の焦点が当たるとかは当日の流れにゆだねられます。

③企画者は、企画趣旨の説明と、必要最低限の司会のほかは、一市民として参加者の方々と同じ立場で発言します。

④フォーラムで議論された内容は、研究所の紀要、ニュースレター等で公開します。ただし、発言に個人のプライバシーに属する内容が含まれる場合には、個人が特定されないよう配慮します。(発言内容を公表したくないと思われる方は、会の終了後その旨お伝え下さればけっこうです)

案内の結果、二三名の申し込みがあった。申込者は、二〇代から七〇代までにわたり、参加者が少なかった三〇代を当研究所の博士研究員三名が補うことで、世代の偏りのないグループとなった(当日参加は博士研究員と企画者を含めて二〇名)。「育てること」に関する立場としても極めて多様な方が集まることになった。女性のほうが多数とはいえ、世代にわたる男性の参加があり、男性からの発言も多かった。小さな子どもの子育て真っ最中の方の参加がなかったのは、日曜に参加することの難しさがあったからであろう。

フォーラムの進行は、企画者からの趣旨説明の後、参加者の参加動機を自己紹介として順に話していただき、その後、自由討論に移った。

内容を詳しく紹介するゆとりはないので一部に触れるに留めるが、後半になって、「やはり子どもの幼い間は母親の役割が重要」という見解と、「今子育てをする母親にとってその言

葉は負担でしかない」という見解の間の衝突が生まれた。前者は主として年配の男性から出され、女性の多くは後者であった印象がある。この衝突による緊張をいくぶん孕みながら議論が展開したと思われる。ただ、この議論を全面的に戦わせるには、三時間の時間も十分ではなく、これに関し発言のない参加者にもさまざまな思いがあったと思われる。

話題は今の子どもが置かれた難しさ、子育ての難しさをめぐって展開したが、時間が終わりに差し掛かった頃にあった、「自分は子どもをこれから持つつもりはない」という発言もまた説得力があり、さらに議論を展開しうるものであった。

三時間という一回の討論としては十分な時間を用意したが、まだまだ議論の途上という感を残して終わった。そもそも何らかの結論に達することを目的とした会ではなく、議論を通して参加者各自の思いや考えが展開することを目指した会である。途上という感覚はどこまでも続くものであろう。最近政府のタウンミーティングでのやらせ発言が問題になったところである。ある方向を定めて行なうフォーラムや、何らかの結論に達するフォーラムは本来の姿ではない。参加者からは、このような会がまた開かれぬのかという期待の言葉も聞かれた。今後の計画は白紙であるが、フォーラムという形態の意義を大いに感じた一日であった。